

【海外留学レポート】

留学経験を手段に自己実現を果たす

-韓国留学を経て起業した留学体験談-

Find Yourself through Studying Abroad: A Story of Starting a Business
through Studying Abroad in Korea

アスレプラス合同会社代表 萩谷 潤

HAGIYA Jun

(CEO, ASHRE PLUS LLC.)

キーワード：起業、韓国留学

はじめに

海外留学での経験は、私のキャリアを構成する要素として最も大きな比重を占めている。私はこれまで二度の起業と、韓国支社を設立する機会に恵まれた。現在の代表を務める会社は「人財」「教育」「就業」を資源に社会へ貢献することを企業理念とし、海外教育機関と国内企業のご協力のもと「日本ホテル就職プログラム」の企画運営というビジネスモデルを作り上げた。周囲の助けもあり韓国のみならず台湾でも弊社の活動は広がりを見せており、今後はベトナムとタイにも活動の場を広げていく計画である。このビジネスモデルの起源や起業の経緯等の全ては、留学先での経験が発端となっている。

本レポートでは、私の留学体験談を時系列で記しながら、留学経験が今の仕事にどのように活かしているのかを見ていきたい。私の体験談ということで他愛ない内容となっているが、これからの日本を率いるグローバルリーダーの育成に本レポートが少しでも役立つことができれば幸いである。

短期語学研修(2002年)～韓国との出会い～

韓国に関心を持ったのは大学1年の終わり頃になる。それまでは韓国どころか海外に興味無く、毎日を部活動に没頭する日々を過ごしていた。当時を振り返ると海外へ頻繁に行き来する現在の生活など想像すらできなかった。朝から晩まで部活動の練習に明け暮れ、高校そして大学ともに碌に受験勉強もせず推薦で進学した。そんな私にとって転機となったのが大学での必修科目であった3週間の

短期海外語学研修だった。当時、金銭的にも余裕が無く、更には海外にまったく関心のなかった私にとって、この科目は単なる負担でしかなかった。そんな私が研修先に韓国を選択した理由は「安くて（渡航費や生活費が）、一番近い国（地理的に）」という安易なものだった。

研修は韓国で名門三大学の一つに位置付けられる高麗大学の語学堂（韓国語を学習する語学校）に在籍し韓国語を学んだ。入学式の初日に韓国語のレベルテストを受けたが、二つにレベル分けされたクラスのうち配属されたのはレベルの低い方のクラスだった。それでも韓国語を習得するという明確な目的のある勉強は楽しく、3週間という短い期間でも驚く程に韓国語が上達した。研修中は、韓国語の授業だけでなく現地の学生と交流する場も与えられた。交流する学生達は、誰もが日本語を流暢に使いこなし日本人の私よりも日本の歴史や情勢について詳しかった。ある時、現地の学生から韓国語も碌に出来ない、更には韓国にも関心が薄かった私に「なぜ韓国へ留学しに来た？」と率直な質問を受けた。その質問をした学生は日本へ留学に行くために必死に勉学に励みつつ、留学費用を貯める為に、毎日アルバイトに励んでいた。そんな人に対して、私の軽率な韓国に来た経緯など言えるわけもなく、自分のあまりの不甲斐なさに恥ずかしさと申し訳ない気持ちでいっぱいになった。こうした現地の学生との交流は、これまでの自分と向き合う貴重な機会となった。

研修が終わる頃には、これまでの部活動中心の生活に終止符を打ち、再び韓国に交換留学へ行くという目標を立てていた。帰国して早々に部活動の退部手続き行い、交換留学生選抜試験の準備に取り掛かった。語学研修で一番大きな習得だったのは、韓国語の向上よりも「海外」に人生を変える無限の可能性を感じたことだと思う。当時は、とにかく自身の見聞を広げることや、これまでの人生に変化を与えることに必死であり、そこで出会ったのが韓国だった。

交換留学での生活と大学院進学 of 動機 (2003-2004 年)

交換留学生の選抜試験に無事合格し、第一希望であった高麗大学への留学が実現した。大学3年時の1年間という短い期間ではあったが、短期語学研修時に刺激を受けた現地の学生達と同じ環境で勉強ができると思うと胸が高鳴った。当然ながら、短期の語学研修とは環境が全く異なり、一般の学生と同様に大学の講義も受講し、必然と現地の学生と過ごす時間が多くなった。サークル活動にも積極的に参加した。サークルに参加し最初に驚かされたのは、洗面器程のサイズの盃にマッコリ（米で作った韓国の伝統酒）を山盛りに注がれ、それを一気に飲み干すという高麗大学伝統の新生への洗礼行事であった。私の記憶が確かならば、その行事の持つ意味とは、これまで学んできたことを全て吐き出して（嘔吐することで）、新しい気持ちを学び直すという意味表示だという。現地の学生と交流しながら分かったことは、韓国はお酒と人との交流が非常に密接な関係にあるということだった。お酒が決して苦手な方ではなかった私にとって、こうした飲酒文化は韓国人との交友関係を広げるのに非常に助けになった。交換留学中は、とにかく多くの韓国人との親睦を深め、韓国語の学習に没頭するとい

う日々を送った。また、驚かされたのは韓国の大学は24時間図書館が開放されており、嘘のように学生が明け方まで勉強をしていた。特にテスト期間になると図書館の学習席を確保する為に我先にと競い合った。大学の授業風景で印象的だったのは、パワーポイントを使用したグループ発表が非常に多かったことだ。恥ずかしながら、私はパワーポイントの使い方が分からず韓国の友人に教わりながら課題をこなしていった。また韓国の大学生は、その頃から「サイワールド」という日本ではまだ、それ程に普及していなかったソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)でオンライン上にグループ発表のコミュニティを作り、効率的に情報を共有しながら課題に取り組んでいた。韓国の若者のインターネットを生活に積極的に取り込み、使いこなしていく姿を目の当たりにし驚かされた。

交換留学中は韓国語の上達はもちろんのこと、現地に密着した生活を送り、韓国文化や国民性を知る貴重な時間となった。韓国は知れば知る程、日本と似ているようで全く違う国であることを体感し、外観では決して分からない、微妙な差異に更なる好奇心を掻き立てられた。

この頃、日本では韓流ドラマ「冬のソナタ」が空前の大ヒットとなる。私が交換留学へ行く前は、韓国渡航にネガティブな反応を示す日本人が多かったのに対し、韓流ブームによって韓国へ熱い眼差しが注がれると、ソウルの街は一気に日本人で溢れるようになった。この突然の変化に驚きを感じたと同時に、韓国にあれほど関心の薄かった人達が訪韓し、どのような行動を取るのか興味を持つようになった。そして調べて行くと「観光経営」という学問があることを知り、観光客の行動メカニズムを探る方法として、マーケティング論の消費者行動という研究分野があることを知った。当時のインバウンド観光客数は、日本よりも韓国の方が多く、インバウンド観光の研究も韓国では活発に行われていた。そこで、韓国の大学院で観光経営学を学び、訪韓日本人観光客の行動メカニズムをテーマに勉強する為に進学を決意した。

フィリピン短期留学(2006年)

大学卒業後、観光経営の研究で有名な慶熙大学院に進学した。消費者行動に関する研究の第一人者である教授の研究室にも入ることができ、修士論文を書くには恵まれた環境が整っていた。更に、韓国政府が奨学金を支給する大韓民国政府奨学生にも選抜され、金銭的な心配無く学問に専念することが出来た。経済的な余裕が生まれたことでフィリピンへ短期留学にも行くことができた。日本では馴染みが薄いですが、フィリピンは韓国で人気の英語留学先となっている。私も冬休みを利用して約3か月フィリピンへ留学した。フィリピンへ英語留学など韓国に住んでいなければ考え付かなかったと思う。これも韓国に留学へ行った恩恵の一つだったと言える。フィリピンでは、スービックという街に滞在した。この街は1991年まで米海軍基地だった場所で、アメリカの南国を思わせる街並みが広がっていた。現在でも街に入る為にはゲートで身分証のチェック等を受ける必要があり、フィリピンで一番懸念される治安の悪さも、ここでは感じる事がなかった。私の通った学校は、韓国人が経営する英語

学校で、出される食事もなぜか韓国料理か韓国風フィリピン料理だった。韓国人と接していると、食に関して非常に保守的だと思う時がある。学校で出された食事の件もそうだが、フィリピンで韓国人が経営する韓国料理店は、いつも韓国人の客で賑わっていた。スービックはゲートで隔離されている分、治安が良いことは魅力的であったが、フィリピン現地の生活を体験するには物足りなさを感じた。私は現地の生活を見る為に授業の無い日は積極的に街を飛び出した。その度に、貧困な生活を強いられている人達を目の当たりにすると同時に、富裕層の生活も存在する現実を知った。フィリピンには日本や韓国では想像がつかない程の貧富の格差社会が広がっていた。私が現在経営する会社の企業理念は、この時の体験が土台となっている。



写真1：スービックの隣町オロンガポ街並み 写真2、3：バナウェイの棚田に暮す子供達

大学院での生活(2006年～2008年)

大学院では、観光学と経営学に関する文献を毎日読み漁り、授業の課題や発表の準備、そして修士論文の作成に追われる日々を過ごした。当時は学問として経営を学んでいたが、経営について知れば知る程その魅力に好奇心を掻き立てられた。この頃から、いつか自分でも会社を起し経営者として仕事をしたいと強く思うようになった。また、専攻であった観光経営の知識が、日本のホテルへ海外人材を就職させる教育プログラムの立案と運営という現行のビジネスモデルに活かされている。

大学院での留学生活は、楽しい思い出よりも苦しかった記憶の方がはるかに多い。留学生である私は、当たり前ではあるが他の学生より文章の読み書きに人一倍の時間を要した。もちろん海外の大学院へ進学を決心した時から覚悟していたことではあったが、この現実には精神的に大きな負担となった。特に修士論文の作成や発表は想像以上に苦勞をした。行き詰ると寮に住んでいた同じ研究室の先輩や韓国の友人に一から十まで手伝ってもらった。改めて当時を振り返ると、本当に多くの助けのもと大学院を卒業することができたと痛感する。そんな経験から海外留学で大事なものは、周囲の人に助けを求める勇気と、助け合える人間関係を構築することだと思ふ。更に、この時期に数えられない程、恥をかき落ち込む経験をした。韓国語で発表をすれば、発音が悪く笑われることも多々あった。周囲の優秀なネイティブの学生と比較し、自分の能力の低さに落ち込んだりもした。この時は、自分がネイティブと同等であろうとした時期で、そうであろうとすればする程、空回りしていた。それが、ある時

期からネイティブを目指すのではなく、ノンネイティブである個性を活かそうと考えを改めるようになった。そうすると不思議と気持ちも楽になり、嘘のように事がスムーズに進むようになった。後に、韓国で会社を設立し、ビジネスで韓国と接するようになった際も同様の経験をした。こうした、ノンネイティブであることの開き直りは、海外で円滑な生活を送る為の合理的且つ効率的な術となり得ることを知った。



写真4：大学院修士課程卒業式

留学生活終盤～海外からの日本の就職活動(2007年)～

修士論文を手掛ける合間にインターネットで就職活動も行い、卒業後は帰国し某旅行会社に就職した。海外からの日本の就職活動は思った以上に大変で、書類審査やオンラインテストに通過した後の面接は、実費でフライトを手配し韓国と日本を往復した。こうした就職活動には経済的に限界がある為、エントリーする企業は2社に絞り行った。卒業後は韓国ではなく日本で就職することは早い段階から決めていた。その理由の一つは、いつしか自分で会社を起こし経営者になることを目標としていた私にとって、ビジネスマンとしての基盤を日本で習得したいと思ったからだ。海外から日本を見ていて、日本企業の底力と日本人のビジネスマインドの高さに憧れを抱いていた。また、日韓の違いとして、韓国は特定の分野のスペシャリストを目指す傾向があるのに対し、日本企業は広範囲な知識や技術を持つゼネラリストを育成しようとする点がある。会社の経営者を目指すにおいて広範囲に仕事を体験できる職場は大きな魅力だった。二つ目の理由は、日本企業の新卒採用を重視する風潮が大きく影響した。日本企業は新卒一括採用を重視し、中途採用よりも新卒の方が何かと有利な傾向がある。こうした中途入社への懸念と新卒の優位性を活かしたいと考えた。

私が就職活動を行ったのは2007年終わり頃の話である。それから約10年が経過した現在は、優秀な日本人留学生を海外から確保すべく柔軟な採用活動を行う企業も増えている。私の頃と比べると海外からの就職活動は行い易い環境になりつつあるが、海外のグローバル企業と比較すると、まだ日本企業は保守的な部分が多く見受けられる。

終わりに

その後、苦労して就職した会社を恥ずかしながら1年もしないうちに退職し、友人と100万円ずつ出資し合い資本金200万円の小さな会社を立ち上げた。その後に周囲の人に助けられながら会社も順

調に業績を伸ばし 2011 年に韓国支社を立ち上げ、2014 年に現在のアスレプラス合同会社の設立に至った。私の場合は運も良く海外留学での経験が今の仕事やキャリアに直結している。これまでの経験上、海外留学に行ったからといって必ずしも夢の実現やキャリアに直結するとは限らないのが現実である。その違いの要因の一つは、留学の体験を「目的」としているか、または一つの「手段」として捉えるかの違いにあるように思う。これから留学を考えている、または現に留学中の方は、留学で得た経験を是非ひとつの道具として使いこなし、次のステップに繋げて欲しいと思う。加速するグローバルゼーションの中で飛躍する人材となる為には、必ず若いうちに海外という環境で揉まれ、国際化の感覚を研ぎすますことが必須となる。単に外国語能力が武器となる時代はとっくに終焉し、これからは異国の文化背景までを理解する力が必要となる。その為には、異国の地で実際に生活をしながら多くの異文化と接触し体感する経験に勝るものはないと思う。残念ながら日本で言われるリーダーシップは、まだ国内に視点が向きすぎる傾向が多々見られる。これからの日本を率いていく若きリーダーには海外留学での経験という貴重な道具をふんだんに使いこなし行動に移してほしい。